

第 8 章

教育環境の整備

発災直後の各校の状況

大熊町には、教育機関として大野幼稚園、熊町幼稚園、大野小学校、熊町小学校、大熊中学校がある。2011（平成23）年3月1日現在、幼稚園児334人、小学生726人、中学生368人が学んでいた。町内すべての教育施設では耐震化が完了し、小・中学校に冷暖房設備、中学校には2つの体育館と全天候型のテニスコートが整備されていた。また、特別支援が必要な児童・生徒のケアを行う学級担任補助員や学校司書も配置されていた。

平成23年3月11日の地震後、各校・各園では、子どもたちの安全確保と保護者への引き渡しを最優先事項とした。大熊中学校では午前中に卒業式があり、地震発生時、すべての生徒は下校していた。大野小学校では児童の一斉下校を終えていたものの、熊町小学校には児童が在籍していた。夕方には熊町小学校に津波から逃れた熊川地区の住民たちが避難し、津波の再来を警戒して同校にいる人は児童も含めて町総合スポーツセンターへ避難した。熊町小学校近くの熊町幼稚園に残っていた約30人の園児も消防団のポンプ車や園職員の車でスポーツセンターへ向かった。大野幼稚園には約50人の園児が在園し、教諭たちは大きな揺れが収まるのを待って園児を園庭へと避難誘導した。日が落ちてくると、大野幼稚園と町内の児童館に残っていた子どもたちは、施設が新しく、町役場にも近い町保育所に集約。保育所には140人を超える子どもたちがおり、園庭内に入れた保育士たちの車で暖を取りつつ保護者に引き渡した。

各園、各校とも施設を離れる際には避難先を記した張り紙を残し、スポーツセンターと保育所で保護者の迎えを待った。

11日のうちに子どもたちの引き渡しは完了。一方で、熊町幼稚園の園児1人と熊町小学校の児童1人が帰宅後に津波の犠牲となった。

各教育施設の地震による被災状況は、その後の全町避難、帰還困難区域の指定に伴い、平成29年3月末の時点で未確認のままとなっている。



震災の日に行われていた大熊中の卒業式

一次避難先の子どもたち

全町避難により、子どもたちは保護者とともに県内外へ避難した。4月の新学期を間近に控え、子どもたちはどこで学習を再開できるのかという保護者の不安は強かった。文部科学省は3月14日、全国の幼稚園や小学校、中学校、高等学校に対し、地震・津波、また原発事故による被災地域からの転入について、柔軟に受け入れるよう通達。転入にあたり必要書類がそろわなかったり、避難中の短期的な編入であったりしても、速やかに受け入れを判断することなどを求めた。一方、町教育委員会は20日、町内の児童生徒の保護者に対し「学校教育について」という通知を出した。そこでは町立学校について「年度内は休校すること」「4月以降は子どもたちが同じ学校で入学、進級できる道を探っていること」「転校は保護者の判断で自由であること」などを知らせている。3月22日には、県教育委員会が平成23年度県立高等学校入学者選抜の合格者を発表。大熊町に立地していた双葉翔陽高等学校を含め、避難指示が出た地域の5校については、合否判定ができなくなったため全員合格の措置をとった。

この間、各避難所では、避難先の自治体やボランティアによる学習支援が行われた。地域の住民たちが子どもたちのために本や漫画本を寄付してくれる避難所もあった。3月21日には、町の教育委員会の主催で「6年生の卒業を祝う会」が田村市総合体育館の玄関ロビーで開催された。体育館の避難者も会の間はロビーを空けることで協力。2校合わせて39人の卒業生が集い、町で準備していた卒業証書の持ち出しはかなわなかったものの、今後の抱負を一人ずつ発表した。最後は山本有三の詩『心に太陽を持て』を全員で朗読し、会を締めくくった。

また、平成23年3月22日から31日までの10日間、檜枝岐村で子どもたちの移動教室が開かれた。檜枝岐村は福島県の西南端に位置し、尾瀬国立公園の玄関口として知られている村だ。町と村は震災前から子どもたちの交流活動を実施しており、全町避難を受け、村が「少しでも心と体を休めてほしい」と打診してくれた。参加したのは小学4年生から中学2年生までの52人の子どもたち。保護者12人も同行した。村の民宿に泊まり、学習会やスキー教室など村役場で企画してくれたイベントを子どもたちは楽しんだ。



檜枝岐村で雪遊びを楽しむ町の児童

学校再開へ

平成23年3月25日、町の拠点を会津若松市に移すことが発表され、町立の幼稚園、小・中学校も同市で再開されることになった。避難所を中心に保護者への意向調査を実施した町は、同月28日の段階で小・中学校に通う児童生徒を計260人程度と見込み、廃校となっていた旧市立河東第三小学

証言 1、2日で帰れると思っていたから、犬、猫、鶏をそのまま町に残してきた。一度、一次避難中に防護服の代わりにカッパを着てえさを置きに行った。今思えば、連れてくれば良かったのに、「これ食べてしのいでる」ってえさだけ置いてきた。（町民女性）

校舎に小・中学校を併設する予定だった。小学校校舎は電気、水はすぐに使える状態であり、備品の購入については会津若松市教育委員会が全面的に支援。机と椅子は生徒260人と教職員79人分、コピー機、印刷機、ファクス、電話回線接続に至るまで必要数を町側で割り出し、会津若松市教育委員会に伝えればすべて手配してくれた。会津地方で関係業者とのつながりがない町にとって非常にありがたい措置だった。幼稚園の設置場所として挙げた旧河東第一幼稚園は、直前まで開園していたため園の備品をそのまま使用させてもらえることになった。

その後、就学希望者は増え続け、同月31日の町災害対策本部会議では幼稚園58人、小学生209人、中学生121人（同月30日現在）と報告されている。足りない備品はさらに追加で注文したほか、会津若松市から寄贈も受けた。幼稚園も規模が足りなくなり、旧河東第三小学校隣にあり、閉所していた保育所も使わせてもらい、年長組を入れることにした。結局、その後も希望者は増え続け、小・中学生を旧河東第三小学校だけで収容することは不可能と判断し、中学校は役場出張所が置かれる旧県立会津学鳳高等学校校舎2階に設置されることになった。町は避難自治体の中でも学校再開の方針が早く打ち出されたため、町と同様に避難生活を送る双葉郡の保護者からも町立学校への区域外就学の相談もあったが、まずは町民を優先させた。



旧河東第三小学校に開設された町立小学校



旧河東第一幼稚園に開設された町立幼稚園

一方、県教育委員会は震災と原発事故の影響を考慮し、教職員の人事異動を凍結。町教育委員会は4月1日、田村市の中央公民館に分散避難していた小・中学校の教職員を集めて着任式を開いた。会津若松市への学校施設の移転を説明し、子どもたちにとって親しみのある震災前からの教諭たちも移動して着任してほしいと理解を求めた。講師数名を除く教職員は会津での勤務を了解し、さらに町採用の講師4人が加えられた。教職員は準備のため、町民の移動に先駆けて会津若松市内のホテルへ移動。学校内の教室などの配置は主に教職員に任せられ、会津若松市教育委員会の手配で納入された備品を確認、適所に配置した。さらに、教諭たちはそれぞれの担当児童、生徒たちに個別に電話を入れるなどして、所在と町立学校への就学希望の確認を本格化させた。避難所以外の子どもの所在把握や就学意向調査が困難な状態で、就学希望者が増え続けた背景には各教諭の地道な確認作業の影響が大きい。

4月16日、会津若松市文化センターで幼稚園、小・中学校の合同入学・入園式が開かれた。新1年生の多くは、全国から贈られたランドセルを背負って出席した。始業式は各校で同月19日に開かれた。各校の就学児童は19日時点で、町内の就学児童・生徒の47.6%にあたる幼稚園135人、小学生357人、中学生216人。子どもたちは会津の地で新たな学校生活をスタートさせた。一方、778人（52.4%）の子どもたちは町立幼稚園や学校以外での区域外就学を選んでいる。

通園・通学手段と給食の確保

二次避難先の割り当ての際、町は学校に通う子どもがいる家庭を市内の東山温泉に集約するなど措置を講じた。しかし、予想を超える数の子どもたちが集まり、児童生徒の避難先は市内全域、そして北塩原村や喜多方市など広範囲に及んだ。課題となったのは通園・通学手段となるスクールバスのルート設定だった。町からはスクールバス2台を持ち出していたが、さらに会津の民間バス会社に約10台を手配。会津地方の地図に子どもたちの所在を書き込み、ルートを設定した。バス会社の協力で一般のバス停留所が近くにある場合はそこをスクールバスの停留所として使わせてもらったほか、ルート設定にも関わってもらい、既存の路線に迷惑がかからないようにした。ルート設定後は教育総務課職員が全コースを試走し、通行が可能か、始業時間に間に合うのかを確認した。運転手と各バス1人の添乗員は、会津若松市のハローワークに登録し、町の嘱託職員として採用した。始業時間は午前9時に遅らせた（平成24年から午前8時）。

ルートの見直しはほぼ毎日行われた。二次避難当初は宿泊施設間の移動や民間のアパートに移る人が相次いでいた。その日の朝に新しい避難先での子どもの送迎を依頼してくる保護者も多く、毎朝、教育総務課と運転手、添乗員はその日のルートを変更せざるをえなかった。バスに乗り遅れた子どもは職員が公用車で送迎することもあった。ルートがある程度定まったのは約半年後のことだ。

一方で、スクールバスのルートや停留所の配置について、受け入れ自治体側の住民への広報が行き届かず、自宅近くが停留所になった会津若松市や喜多方市などの市民からの問い合わせも数件あった。事情を説明すると理解してくれ、アパートなどの敷地内に子どもと保護者の待機場所を用意してくれることもあった。

学校給食も課題だった。会津若松市との協議で、同市の給食センターで調理、提供することとし、町が市の契約調理・運搬業者と別途契約することで費用負担することになった。一方で、食器などは別にそろえる必要があったが、東日本大震災で被災した教育施設、給食センターは福島に限らず、全国的に給食用の設備は不足していた。また、市の給食センターとしても急な提供数の増加には対応できず、設備や人員を補強する必要があった。町教育委員会は給食準備が整うまでの間、各園、各校とも午前で授業を切り上げた。小・中学校でパンと牛乳だけの給食が開始されたのは、5月16日のことだ。給食が開始されたことで小・中学校の午後の授業と中学校の部活動が可能となった。翌週からはゼリーなどのデザートが加わり、6月1日には小・中学校の完全給食がスタートした。午前9時登園、11時降園という短時間の教育しかできなかった幼稚園でも、平成23年11月1日から完全給食が開始された。



再開された給食を楽しむ児童

証言 大熊の情報が入ってこない。福島新聞、1日遅れでもいいから送ってくださって避難所の人に頼んだ。（町民男性、県外の避難所で）

避難先での各校の歩み

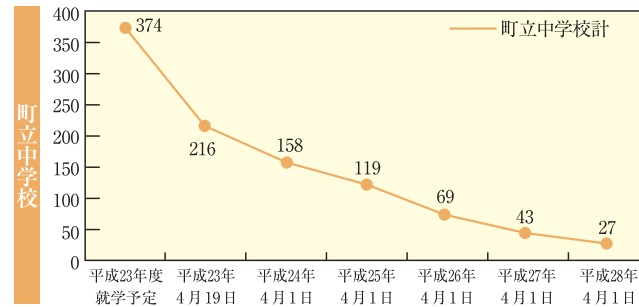
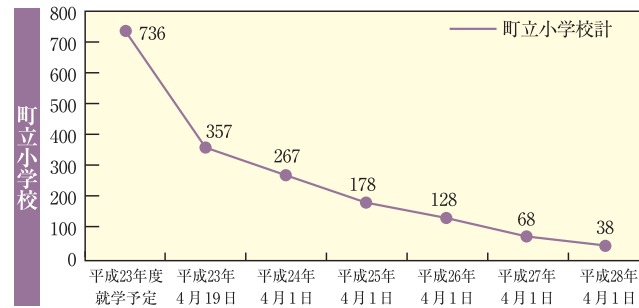
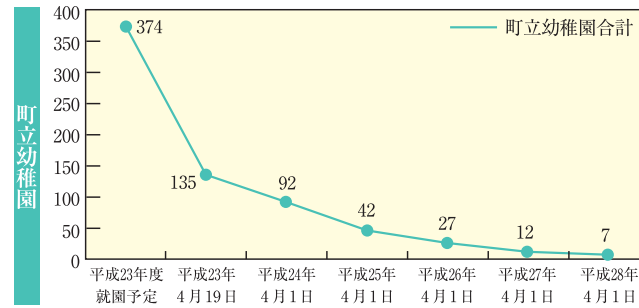
会津若松市に開設した幼稚園、小・中学校はその後の避難生活で、いずれも規模の縮小傾向が続いている。

大野幼稚園、熊町幼稚園は両園の枠組みを保ったまま町立幼稚園として開園。園長1人が両園を兼任し、教職員は2つの園それぞれに所属する形をとった。平成23年4月19日現在で135人が在園し、年少・年中クラスは旧河東第一幼稚園、年長クラスは旧大田原保育所に登園した。およそ1年後の平成24年4月1日現在の園児数は92人まで減っている。平成25年度には園児数の減少で旧河東第一幼稚園に集約。平成27年度からは幼小連携を図るため小学校隣接の旧大田原保育所へ幼稚園を移設した。その後も避難先への定住が進むにつれ園児数は減少し、平成28年4月1日現在の園児数は計7人となった。

大野小学校、熊町小学校も両校の枠組みを保った形で開校。1つの校舎で、それぞれに校長以下教職員が配置されている。学校行事は2校合同で実施したが、授業はそれぞれ別に展開された。平成23年4月1日現在で計357人（大野小204人、熊町小153人）の児童が在籍し、旧河東第三小学校へ登校した。平成24年4月1日現在の児童数は計267人（大野小157人、熊町小110人）に減少。平成28年4月1日現在の児童数は計38人（大野小19人、熊町小19人）となった。児童数の減少に伴い、平成27年度以降は2校の子どもたちは1学級で学び、教諭も学校の所属に限らずどの児童にも指導できるよう方針を変更した。

当初、小学校とともに旧河東第三小学校で開校する予定だった大熊中学校は、旧県立会津学鳳高等学校校舎2階で新学期を迎

■ 町立学校の園児、児童生徒数の推移



■ 他県及び県内の市町村へ避難した児童生徒数

他県へ避難した児童数		県内の市町村へ避難した児童数	
都道府県	人数	市町村	人数
埼玉県	39	いわき市	285
茨城県	35	会津若松市	81
宮城県	22	郡山市	55
栃木県	18	南相馬市	15
千葉県	16	相馬市	10
その他	77	福島市	10
		その他	45

他県へ避難した生徒数		県内の市町村へ避難した生徒数	
都道府県	人数	市町村	人数
茨城県	23	いわき市	132
埼玉県	13	会津若松市	58
宮城県	8	郡山市	24
栃木県	8	相馬市	9
新潟県	7	福島市	5
千葉県	7	その他	23
東京都	6		
神奈川県	6		
その他	16		

※平成28年4月8日現在。会津若松市の数値は町立小・中学校の児童生徒を含む



プレハブ造りの大熊中仮設校舎

プレハブの校舎を新設し、移転した。仮設校舎には視聴覚室やコンピューター室、理科室、音楽室、図書室、多目的室を完備。また会津短大のグラウンドや体育館などの施設も共用利用できるなど、教育環境の充実が図られた。この移設にあたっては、建設地に建っていた会津若松市の書庫を撤去して場所を提供するなど、会津若松市の全面的な協力を得ている。

避難先での教育という現状を踏まえた取組として、平成26年度に「ふるさと創造学」がスタートした。原発事故により大きな影響を受けた双葉郡8町村の小・中学校共通の取組で、ふるさとを離れて避難生活を送る子どもたちにふるさとへの愛着と誇りを持ってもらうことが目的。町では小学1年～中学3年まで一環したプログラムを組み、扱う内容は大熊町の歴史や産業など多岐にわたる。その1つに放射線に関する学習も含まれ、会津若松市の学校付近の放射線量を自分で測定してみることから始まり、放射線が体に与える影響や放射線を使った技術産業など子どもたちがそれぞれに放射線について理解し、必要に応じて身を守ったり、活用したりする知識を身につけている。また、避難生活が長引くに従い、多くの子どもたちにとっては大熊町より避難先での生活の方が長くなった。避難後に生まれ、大熊町を知らない子どもが小学校で学ぶ年齢に成長している。町立学校に通う子どもが体感している「ふるさと」は会津若松市にほかならず、大熊町についての学習を中心としながらも、会津の歴史や文化を学ぶ機会も取り入れるようになってきている。

平成27年4月、町教育委員会は「大熊町教育大綱」を策定。町立学校の児童生徒数が減少を続け、また大熊町への学校帰還の先行きは不透明なままという厳しい現状を踏まえた上で、「子どもは『未来』であり『希望』であり、学校教育の停滞は許されない」とし、「一人一人の個性や能力を引き出すこと」「教育の原点を人間関係に置くこと」を理念に据えた。大綱に基づく平成28年度の教育要覧は、①教育の原点（対面と対話）の再確認、②国語、算数より心のケア・サポート重視、③「読書の町、おおくま」づくりの継続、④教師力の向上——の4点を基本方針とし、初めて「少人数学級のよさを打ち出す」と宣言。幼・小・中の連携のほか、平成25年度に教育連携に関する協定を結んだ会津大学をはじめとする地域社会との連携を強め、教育の質の向上と多様な経験の場の提供を目指している。

証言 コンタクトレンズの替えがなくて、ずっとつけっぱなしでつらかった。同じような状況の職員と一緒にめがねを買に行った。(女性職員、一次避難所で)



小学校でのふるさと創造学の授業風景

区域外就学への対応

町立学校の児童生徒数が減少を続ける中、区域外就学をする町の子どもたちにどのような支援をするかは大きな課題になっている。

町は平成25年5月、子育てや学校に関する悩み相談の場として、会津若松市の町出張所内に「大熊町ほっとルーム」を開設した。福島大学との連携事業で、同大学の子ども支援コーディネーターが子どもの様子で気になることから学習環境、体調まで相談に乗り、必要に応じて専門家につなぐ。8月にはいわき市の町出張所にも同じく設置した。平成27年度にはスクールソーシャルワーカーを2人体制にし、避難児童・生徒が多いいわき市に配置。避難先で起きる課題について子ども、保護者が相談できる体制を作っている。

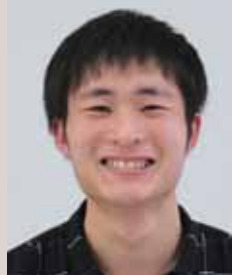


町役場会津若松出張所に開設されたほっとルーム

子どもに対しては、平成27年夏からいわき市の仮設住宅集会所で放課後教室を開催。町として避難先学習支援をするとともに、それぞれ別の学校に通う町の子どもたちが顔を合わせることで、避難先で町とのつながりを感じる機会になることも狙った。また、いわき市の駅前にフリースクールを開設。避難先で不登校気味になった子どもたちの受け皿になっている。この放課後教室やフリースクールは町の事業ではあるが、双葉郡8町村の教育長会で協議し、郡内の子どもなら誰でも利用できるようにした。その後、いわき市の保護者からの相談も受け付けるなど、避難先自治体も含めた教育支援の一翼を担おうとしている。

震災を経験したからこそ、交流と経験

証言 NUMBER ①



熊二区住民
大熊中学校生徒会長(当時)

池田 慧生さん

震災当時は中学1年生で、3月11日は先輩方の卒業式の後、友だちの家で遊んでいました。地震にひどく動揺しましたが、ちょうど友人宅に大人がおらず、母がいた私の家に友だち4人で走って向かいました。

翌日、私は母の運転する車で西に避難しました。はじめに着いた田村市常葉町の体育館は満員で入れず、次に向かった船引小学校で受け入れられました。その時、町で深刻なことが起こ

っているとは思ってもみませんでした。テレビで福島第一原発の爆発を知っても、すぐには帰れないと思いましたが、ここまでの長期避難など先のことはあまり考えていなかったと思います。船引小学校では風呂に入れなかったり寝にくかったりそれなりに不便でしたが、それほど辛いとは思いませんでした。それよりもボランティアの方が作ってくれた焼きそばが久しぶりの温かい食事でもおいしく、しかも「中学生ならお腹空いているだろう」とおかわりをもらったことがうれしかった記憶として残っています。

その後、同じ船引のデンソー工場に数日いてから、親戚のいる埼玉県に向かいました。途中、栃木県内のガソリンスタンドで、福島から避難してきたことを知った店員の方に「裏からまわっておいで」と言われ、本来提供していないガソリンを入れてもらいました。その心遣い

には感動しました。

埼玉に避難中、大熊中学校が会津若松市で再開することを知りました。もともと埼玉の中学校に通うつもりがなかったので、早めに再開してもらえてよかったと思いました。再開直後は教科書がなくてプリントを使った授業でした。教科書が届き、本格的に授業を再開できたのは2週間ほど後だったと思います。最初は勉強よりも友だちに会うために通っているようなものでした。一度は離れ離れになったけれど、みんな変わっていませんでした。見ず知らずの土地で、学校が一番落ち着いていられる場所だったかもしれません。

そんな大熊中学校も卒業の時を迎えました。震災前なら進路が異なっても町から通う子がほとんどでしたが、避難生活では会津に残る人、浜通りに戻る人、県外に出る人と様々です。バラバラになる前に一生忘れない思い出を作りたくて、歌手のA Iさんに手紙を出して卒業式で歌を歌ってくれるようお願いしました。A Iさんは本当に来てくれて素敵な歌声を聞かせてくれました。本当に一生忘れられない思い出ができました。

子どものころから地震研究者になるのが夢で、福島高専に進学しました。現在は地盤について学ぶ研究室に所属しています。震災は私の人生にとって悪い影響ばかりではありませんでした。むしろ、いろいろな人との交流や多彩な経験をするなどプラスになることが多くありました。大熊町に暮らしたのは中学1年まででしたが、たくさんの思い出があり、今でも大好きです。将来、何らかの形で町に関わり、貢献したいと思っています。

証言 福島第一原発3号機の爆発後、避難先で昨日まで開いていた薬局や店が閉まっていった。なぜだろうと思ったら、避難先の方にも自主的な避難が広がっていたのだった。(女性職員、一次避難中)